

シンポジウム「これからの日本の学協会のあり方」

日 時:平成19年3月16日(金) 13:30～16:30

場 所:日本学術会議6C(1)～(3)会議室(6階)

主 催:日本学術会議科学者委員会 学協会の機能強化方策検討等分科会

1 基調講演「学会の社会的責任は何か:あり方を考える」ーグローバル時代の学会と課題ー

講演者:黒川 清(内閣特別顧問・日本学術会議連携会員)

1-1 講演内容

- ・ 学会の本来目的は学術情報の交換、会員の交流を通じた社会への貢献である。
- ・ 学術集会、紀要発行等が学会活動の中心であったが、グローバル化の進行や、近年の経済の低迷の中、学会のミッションのプライオリティの見直しが必要となっている。
- ・ 海外の学会は会員資格に厳しく、また、総会が厳しいピアレビューの場となっている。そうした中で、優れた研究者の育成や不正防止が担保されている。
- ・ 中でも米国の学会は、「世界の研究の「真剣勝負の競技場」」であり、世界中から人が集まる。海外からの人が集まらない我が国の学会は、そのあり方を見直す必要がある。
- ・ 一昨年に NIH が、公的資金を出している研究論文についてはオープンリソースとする方針を打ち出した。大手出版社等は強く反発したが、結局公表6ヶ月後にはオープンとする方針となっている。日本の学会もグローバル時代の社会的枠組みの中で、その責任をどう果たしていくかを考える必要がある。
- ・ 若手の育成は学会の重要課題である。カーネギーメロン大学等の世界の一流大学では、大学を卒業した研究者、大学院生、ポスドク等はその期間が終われば外に出すポリシーを持っており、それが卒業生、院生等を通じてその指導教員、ひいては大学の評価につながる。
- ・ 最終的には科学者一人一人が国際社会からの信頼を築き上げていくことが重要である。学会が、そのためのチェック機能を果たす必要がある。
- ・ 公益法人改革が進められようとしている。法律の原案には学会は対象として明記されていなかった。学会の公益性が問われている。同じ分野で5つや10の学会が認可されるとは到底思えず、分野が重複する学会は統合に向けて自ら改革していく必要がある。
- ・ これらはグローバル時代に、わが国の研究者とその集団が自律機能を持っているかを問われているのだ、ともいえる。